ピアノ

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピアノ

【Ｎコード】
Ｎ８４５５Ｔ

【作者名】
三嶋文絵

【あらすじ】
ピアノの発表会を終えた夜、千栄は両の手首を切った。動機は幾らでも想像できる。が、その知らせを聞いたとき、閃いたのはたった一つだった。★外部サイト「みくり」掲載作品です。

千栄が死んだ。――幸いそれは誤報だった。千栄の居場所は今も病院で、目覚める可能性は今もある。

千栄が自殺した。――こちらも今のところは誤報だ。だけど、このまま助からなければどうなんだろう。それはもう本人の力の及ぶところではない。達成に時間がかかっているだけで、決行は既に済んでいる。千栄の『自殺』は終わっていると、あたしは思う。

千栄が自殺を図った。――これならどう転んでも誤報にはならない。事故であるはずがない、どうなったら偶然手首にぱっくり開いた切り傷ができる。どうなるかわかっていなかったはずがない、湯を張った浴槽にその傷口を沈めて。他人が殺そうとしたわけでもない、だったら左右とも切るなんて多数派でないことはしない。

間違いなく、千栄は死を望んだのだ。

小学校を卒業してから、千栄とはほとんど会っていない。ピアノの練習が忙しい千栄には、遊べる日などほとんどなかった。中学が同じならクラスが違っても会う機会はあっただろうが、中学が違えばお手上げだ。疎遠になるのは仕方のないことだった。

それでもたまに、遊べないかと電話をかけてくることがあった。用事がなければ二つ返事であたしはＯＫした。断らなければいけないときは申し訳ない気がした。貴重であろう休日に、折角会いたいと言ってくれたのにと。

「よく嫌にならないね」

「好きだもの。ピアノ」

半ば呆れたあたしの言葉に、屈託なく即答したのはいつだったか。習い始めたのは親の意思でしかなくても、習い続けているのは千栄の意思でもあった。

遊ぶ時間は減るけれど、補ってあまりある。大変なこともあるけ

れど、苦にならない、苦と感じない。そんなことをあの子は言った。語るときの顔を見れば、声を聞けば、頷けた。好きなのだなと心から思えた。ピアノを弾くこと。曲と向き合うこと。練習に打ち込むこと。

同級生との距離がある程度までしか縮まらなかろうと、付き合いが悪いと陰口を叩かれようと。短距離走や持久走の記録が伸びないときも、テストの点が期待したほど芳しくなかったときも。不和とまでは行かないぎこちなさやすれ違いを、家族の間に感じ取ってしまったときも。――あの子には、ピアノがあった。

あたしがその位置にいないことはちょっと悔しかったけど、心の支えにするなら身近なものの方がいい。電話で話すことすら滅多にできない相手よりも。電話の時間も取れないのはどうしてかと考えれば微妙というか複雑なところもあるが、あれほどに何かを好きでいられるということが、少し羨ましくもあった。

最後に会ったのはちょうど一ヶ月前だ。発表会が近いと聞いてあたしは目を瞠った。

「いいの？」

「……ん」

千栄は歯切れ悪く言った。

「最近あんまり楽しくないんだ」

「ピアノが？」

「うん。弾いてても」

勿論そうだ、ピアノを弾く話をしていたのだから。馬鹿みたいな質問に、律儀に答えて目を落とす。

「気が乗らないから、上手くいかなくて。上手くいかないと、やっぱり気が乗らないの」

見本のような悪循環に陥っているらしかった。楽しいから上達し、上達するから楽しいという、やはり理想的だった好循環と正反対に。

不思議な気分だった。ピアノの話になると、普段はもっと生き生

きしているのだ。元気のない表情も口調も初めて見聞きしたわけではないけれど、話題とのギャップがありすぎて、戸惑わずにはいられなかった。

その一方で、これが本当だとも思った。これまでが奇跡だったのだ。素直すぎ、前向きすぎ、いい子すぎたのだ。偏りすぎた毎日に、本当はとっくに、嫌気がさしていていいはずだった。だから——心配すると同時に、安心してもいたかもしれない。やっぱりきつかったんだと。それをやっと正直に感じ、認められるようになったんだと。

思い返せば馬鹿だった。あの子が心からピアノを好きだったこと、あたしはよく知っていたはずだったのに。習わされていただけで、楽しんでいるようだったのは強がりや空元気にすぎなくて、実はそこまで入れ込んでいたわけではないのだと、何も知らない人間のように解釈していた。わかりやすい解釈に飛びついていた。自分の尺度でしか考えられなかった。

そしてまた、どこかで高を括ってもいた。そう言っているのは今だけだろうと。ちょっとしたことでいずれ好転して、今の話が嘘だったかのように、嬉々として鍵盤を叩くようになるのだろうと。矛盾するようだけれど——いや、明らかに矛盾だった。表面上楽しんでいるようだけれど、本当は嫌いだということが判明したと思っていたのか。一時的に苦しんでいるようだけれど、本当は好きなんだから大丈夫だと思っていたのか。

要するに、真剣に向き合っていなかったのだ。千栄が暗い顔と声でピアノのことを話したという、前代未聞の事態を適当に流してしまったのだ。そのことをあの子は悟っていただろうか。自分の思考の矛盾にさえ気づかなかった、鈍いあたしに失望しただろうか。

音沙汰がないまま一ヶ月が過ぎた。何の不審も抱かなかったのは、ここは仕方ない。いつものことだったのだから。そして。

発表会を終えた夜、千栄は両の手首を切った。

気が乗らないと言っていた演奏は、本番も上手くいかなかったらしい。始まる前から自信がないとこぼしていたし、終わった後は落ち込んでいたという。あれは酷かったと追い打ちをかけた人がいたかどうかまではわからない。本人こそが悩んでいたのに、どうしてできないんだと責めた人がいたかもしれない。

上手に弾けなかったこと自体がショックだった。人前だったことが恥ずかしかった。弾けない自覚があったのに、それでも人前に出なければいけなかったことが辛かった。理由は他に、あるいは他にもあって、このことはきっかけにすぎなかった。または、発表会まではと引き伸ばしていただけだった。想像はどんな風にでもできる。

が――左右の手首をどちらも切ったと聞いたとき、あたしの脳裏に閃いた動機はたった一つだった。

発表会で失敗したこと、じゃない。上手く弾けないこと、というのもありそうだけど、多分そこじゃない。弾いていて楽しくないこと――だったんじゃないか。弾くことが好きだと思えなくなっていたんじゃないか。手首を切るというやり方だったのは、しかもわざわざ両方を切ったのは、仮令命が助かったとしても、ピアノは二度と弾けなくなるようにということだったんじゃ――ないか？

楽しかったことが、楽しくなくなった。好きだったものを、好きでいられなくなった。そういうことだったんじゃないか。それで追いつめられたんじゃないか。……好きだったピアノが楽しくないと告げられたときに、どうして理解できなかった！

今さら気づいたところで遅い。千栄の居場所は今も病院で、これきり目覚めない可能性がある。友達と思っていたのに、友達のつもりでいたのに、肝心のときにあたしは何もできなかったのだ。

千栄の家を訪れたのは初めてだった。休んだときに連絡帳を届けるのは、家が反対方向にあるあたしの役目ではなかった。電子ピアノではない、本物のピアノを置ける家であることはわかっていた。ピアノを置いてある部屋の窓の下に、花壇があることは聞いたこと

があった。
深夜と言うには早いのに電気が点いていないのは無人だからだろう。家族はみな病院にいるのだと思うと何となく嬉しかった。ちゃんと心配しているのだ。思い留まらせることは、あたしと同じくできなかったにしても。
侵入は難しくなかった。戸締りがきちんとしていないのは普段からなのか、千栄のことで慌てていたからなのか。後者だといい。
それらしいドアをみつけて開けた。暗がりの中で窓辺にたどりつき、カーテンを開けると花壇が見えた。弱い月明かりを浴びて振り返れば、千栄のピアノはそこにあった。
歩み寄り、蓋を開けて支える。ずらりと並ぶのは厳密には、ピアノ線でなくミュージックワイヤーというらしい。片手に下げてきた新品のワイヤーカッターで、そのうちの一本をあたしは挟んだ。
鋏で糸を切るようにはいかなかったが、覚悟していたから驚かなかった。所謂ピアノ線よりも頑丈らしいとは調べて知っていた。力を込めた分だけ手が痛くなった。
ばちん、と。
抵抗が消えた。切れた弦は両側に飛んで、周りの弦に触れて掠れた音を立てた。あたしは次の弦を挟んだ。
かっとなって、とは言えないだろうし、言う気もない。素材を調べて工具を買う余裕があったのだ。弦がびぃんと巻き戻る音を耳にした瞬間、胸に一種の興奮が湧き上がったようにも感じたけれど、頭の芯は揺るぎないほど冷え切っているようだった。
……おまえが。千栄を、追い込んだ。
千栄の時間を食い潰しておきながら。遊ぶ時間も碌に取れないようにしておきながら。誰よりも近くにいたくせに。他の誰も近づけないようにしていたくせに。
ばちん。
どうして救わなかった。どうして裏切った。支えだったはずのおまえが、どうして死を望ませた。

ばちん。
ばちん。
情けないのはあたしだ。不甲斐ないのはあたし自身だ。気づくことさえできなかった。あんなにはっきり聞いたのに、その意味を理解できなかった。今になってわかるぐらいなら、あのときにだってわかったはずなのに。
……それでも。
ばちん。
ばちん。
あの子にはおまえがいるからと、安心していたのに。任せておけると信じていたのに。どうして、どうして、どうして。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
これで千栄が助かるわけではない。弦と引き換えに容態が安定していくわけではない。わかっている。そんなことはわかっている。無駄で無意味で間違っていることぐらいわかっている。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
一本切るごとにすっとするような、逆に怒りを掻き立てられるような。体は淡々と作業を続ける。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
鍵盤の数で八十八、弦の本数はその二倍を超える。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
手が痛いけれど、先は長い。

ばちん。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
ばちん。
……。
……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8455t/

ピアノ

2011年8月21日03時16分発行